

「カレーのある家」

—初稿—

2025/9/3

雨森 れに

〈人物表〉

早瀬 忍

(9)

養護施設・なごやか園の児童

仁科 利尋

(40)

独身。週末里親をしている

林田 ゆかり

(31)

養護施設・なごやか園の職員

1. なごやか園・忍の部屋（昼）

養護施設内にある6人部屋。

早瀬忍（9）は、リュックに着替えを入れている。

林田ゆかり（31）が部屋に入ってくる。

林田 「準備できた？」

忍 「多分。着替えと宿題あればいいんでしょう？」

林田 「あとは仁科さんが用意してくれてるからね。初めてのお泊り、緊張する？」

忍 「別にい。仁科さんには何回も会ってるし」

だが、忍は浮かない表情をしている。

林田が笑顔で忍の背中を叩く。

2. 仁科家・台所（昼）

古めの台所。コンロの上には大きな寸胴鍋があり、カレーがぐつぐつとしている。

落ち着かない様子の仁科利尋（40）が壁掛け時計を見る。

3. 仁科家・外観（昼）

住宅街にある古い一軒家。

家の前に車が止まり、林田と忍がおりてくる。

忍、匂いに気づいて顔をあげる。

林田 「カレーの匂いがするね。仁科さんちかな」

忍 「昨日もカレーだったのに」

林田 「先生んちなんか3日は続くよ。そういうもんだよ」

忍 「俺、そんなに好きじゃないからヤダ」

林田 「そんなこと言わないの。ほら」

忍、林田に促されて歩き出す。

玄関はガラス製の引き戸で、ほんのりと室内の雰囲気気が伺える。

林田がインターホンを押す。

室内からドタバタと音がし、引き戸が開かれる。

利尋が土間に素足で立っている。

利尋 「いらつしやい。あ、おかえりとかのほうがいいのかな？」

利尋は照れくさそうに笑う。

4.

仁科家・リビング（昼）

台所に繋がる、10畳ほどの洋室。ダイニングテーブルがあり、林田と忍が並んで座っている。

利尋はふたりに向かい合うように座っている。

林田が利尋に書類を渡す。

林田 「今回は明日のお昼までお預かり頂くということで」

利尋 「はい。お任せください。（忍を見て）これからはここが忍くんの家だよ」

忍、目を逸らす。

忍 「どうせ週末だけでしょ。俺の家はなごやか園だもん」

林田 「忍くん」

利尋 「林田さん、いいんですよ。ホントのことなんで」

利尋、忍の横に移動し、跪く。

利尋 「週末だけでごめんね。でも、楽しくやれたら嬉しいな」

林田 「ほら、返事」

忍はしぶしぶ、

忍 「よろしくおねがいします」

利尋は嬉しそうに微笑む。

利尋 「ありがとう。よろしくね」

5.

仁科家・玄関・内（昼）

利尋と忍が、林田の見送りをしている。

林田 「仁科さんを困らせちゃだめだよ」

忍 「わかってるし。明日、絶対遅れないでよ」

林田 「はいはい。また明日ね」

林田が出ていく。

利尋は突然大きい声で、

利尋 「よし」

と言い、早口で続ける。

利尋 「まずはご飯。カレーを食べよう。そのあとは宿題。あ、俺、小学生の問題わかるかな。わからなかったら恥ずかしいなあ。それから散歩かゲームか買い物か――」

忍、慌てて、

忍 「一気に言われたらわかんない！」

利尋 はきよとんとしてから、すぐに笑顔になる。

利尋 「そうだよね。楽しみすぎて突っ走っちゃったよ」

忍 「楽しみ？」

利尋 「一緒にやりたいことだらけってこと。まずはお昼ご飯を
食べよっか」

利尋 がおんぶを促す体勢をとる。

忍 は戸惑う。

利尋 「リビングまでおんぶするよ」

忍 「俺、そんな歳じゃない」

利尋 「だめかぁ。なら、しょうがない」

利尋 は残念そうに笑い、歩き出す。

忍、その後ろについていく。

6.

仁科家・リビング（昼）

忍の目の前に大盛りのカレーが置かれる。

量に驚き、利尋のほうを見る。

利尋の分は忍よりも更に大盛りである。

利尋 「いただきます」

忍 「い、いただきます」

忍はカレーを一口食べ、目を見開く。

忍 「これ、カレー？」

利尋 「口に合わない？」

忍 「ううん。すごくおいしい」

忍は夢中で食べ始める。

嬉しそうな利尋の顔も、目に入らない。

10分ほどで完食し、我に返る。

利尋も食べ終わっている。

利尋、真剣な表情で、

利尋 「これだけは言っておかなきゃいけないんだけど」

忍が唾をのむ。

利尋 「夕ご飯と明日の朝と昼もカレーです」

忍、脱力。

仁科家・台所（昼）

忍 「全然いいよ。これおいしいもん」

利尋 「よかったあ。作りすぎちゃったんだよね」

忍 「それ、見てみたい」

利尋 「何が？」

忍 「作りすぎたやつ」

忍が火のついていないコンロの前に立っている。

身長が足りず、寸胴鍋の中身までは見えない。

忍 「この鍋、おっきいね」

利尋 「俺の親がラーメン屋でさ。店畳むときに持ってきたやつなんだよね」

忍 「仁科さんのお父さんとお母さん？」

利尋 「そ。ふたりとも死んじゃったけどね」

忍、小声で、

忍 「俺と一緒だね」

利尋が忍の肩に手を置く。

忍は沈黙に耐えられず、

忍 「これさ。ホントに全部カレー？」

利尋 「なら、見てみる？」

利尋、玄関でしたように、おんぶを促す体勢をとる。

忍は遠慮がちに背に乗る。

利尋 「よっと」

利尋が立ち上がる。

忍 「高すぎ！」

利尋 「でも、見えるでしょ」

利尋がお玉で鍋をかき回す。

忍 「ホントに全部じゃん」

利尋 「すごい量だよ。忍くんが帰っちゃったら、冷凍するしかないかなあ」

忍 「そしたら、また来週も食べれる？」

利尋 「いいよ。冷凍したのじゃなくてさ、一緒作ろうよ」

忍 「うん」

利尋 「息子とそういうことしたかったんだよね」

忍 「ふうん」

忍の口元が緩む。

8.

仁科家・玄関・内（昼）

林田が迎えに来ている。

忍 「先生、早いよ」

忍が、利尋の背後でふてくされている。

林田、利尋に目くばせして微笑む。

林田 「次はもっと長くても大丈夫そうだね」

利尋 「すごいいい子にしてみましたよ。これからは週末が待ち遠しいです」

忍 「次は一緒にカレー作るもんね」

林田が少し驚く。

忍は靴を履き、利尋に向き直る。

輝くような笑顔で、

忍 「いってきます」

おわり